２０２０．１０．２５（日）マタイ２３：１６～２２

23:16　わざわいだ、目の見えない案内人たち。おまえたちは言っている。『だれでも神殿にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、神殿の黄金にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』
23:17　愚かで目の見えない者たち。黄金と、その黄金を聖なるものにする神殿と、どちらが重要なのか。
23:18　また、おまえたちは言っている。『だれでも祭壇にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、祭壇の上のささげ物にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』
23:19　目の見えない者たち。ささげ物と、そのささげ物を聖なるものにする祭壇と、どちらが重要なのか。
23:20 祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上にあるすべてのものにかけて誓っているのだ。
23:21 また、神殿にかけて誓う者は、神殿とそこに住まわれる方にかけて誓っているのだ。
23:22 天にかけて誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方にかけて誓っているのだ。

＜説教＞

パリサイ人たち（や律法学者たち）のことを、「彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます。」(15:14)とイエスは既に言っておられました。

彼らが「人々の前で天の御国を閉ざし」彼ら「自身も入らず、入ろうとしている人々をも入らせない。」(23:14)様は、また彼らが「改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にする。」(23:15)様は、あの「盲人が盲人を案内」して「二人とも穴に落ち」る様そのものと言えるでしょう。

それ故イエスは再び彼ら律法学者、パリサイ人を「目の見えない案内人たち」(23:16)、「愚かで目の見えない者たち」(23:17)、「目の見えない者たち」(23:19)と言われました。

そして彼らの「目の見えな」さ、その「愚か」さを明らかになさるのでした。

彼らの「目の見えな」さ、その「愚か」さは何だったのでしょうか。

それは、神が見えていなかった、神を見ていなかった、神の方を向いていなかった（逆に人の方だけを見ていた）、自分たちが神の御前に立たされていることが見えていなかった、そして神の御前に立たされているという恐れ（畏敬）がなかったということです。

もちろんそれは今や彼らがイエスを生ける神の子キリストと認めず、信じていなかったということと直結していました。

イエス・キリストを正しく見て、知り、信じる者、恐れる者が即ち神を正しく見る者、知る者、信じる者、恐れる者なのです。

そんな彼らの、神の見えなさ、神の御前に立たされているという自覚のなさ、神に対する恐れのなさを如実に現していたのが「誓い」についての彼らの考え、教えであり、彼らの実践でした。

「あなたがたは、わたしの名によって、偽って誓ってはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。わたしは主である。」（レビ 19:12）

「人がもし、主に誓願をし、あるいは、物断ちをしようと誓いをするなら、そのことば

を破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。」（民数記 30:2）

「あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない。」（申命記 6:13）

「あなたの神、主を恐れ、主に仕え、主にすがり、御名によって誓わなければならない。」（申命記 10:20）

このようなみことば（律法）にあるように、「誓い」と神を恐れることは密接に結びついています。

神こそは人の目には隠されている人の心の奥深くまで知っておられ、真理と偽りを見分けるお方です。

神こそは真理を愛し、喜び、祝福されるお方であり、一方偽りを憎み、嫌い、罰したもうお方です。

律法をよく学び知っていたはずの律法学者やパリサイ人がこの神の御前で、神の目にはどうであったか、神であられるイエス・キリスト、“目の見える案内人”であるお方は言われます。

23:16　わざわいだ、目の見えない案内人たち。おまえたちは言っている。『だれでも神殿にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、神殿の黄金にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』
23:17　愚かで目の見えない者たち。黄金と、その黄金を聖なるものにする神殿と、どちらが重要なのか。
23:18　また、おまえたちは言っている。『だれでも祭壇にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、祭壇の上のささげ物にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』
23:19　目の見えない者たち。ささげ物と、そのささげ物を聖なるものにする祭壇と、どちらが重要なのか。
23:20 祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上にあるすべてのものにかけて誓っているのだ。
23:21 また、神殿にかけて誓う者は、神殿とそこに住まわれる方にかけて誓っているのだ。
23:22 天にかけて誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方にかけて誓っているのだ。

その当時、律法学者やパリサイ人によって間違った「誓い」が教えられ、そういう誓いがなされていて、イエスがその間違いを正されたことは 5 章（33−37）に記されていました。

彼らは「天にかけて」「地にかけて」「エルサレムにかけて」「自分の頭にかけて」誓っていました。

そうやってわざと直接には神の御名をあげない誓いをしました。

だからそういう誓いを破っても、守らなくても、実行しなくても神の前には罪とはならない、神に罰せられることはないと高をくくり、神を侮っていました。

そうやって神の戒めを守らない、守れないことの言い訳とし、抜け道を作り出していたのです。

しかし「天は神の御座」であり、「地は神の足台」であり、「エルサレムは偉大な王の都」であり、「人間は髪の毛一本さえ白くも黒くもできず、それができるのは神だけ」な

のだから「天」「地」「エルサレム」「自分の頭」には神の御名が間接的に記されている。
それ故、「天にかけて」「地にかけて」「エルサレムにかけて」「自分の頭にかけて」誓った誓いも神の御前での誓いなのだから本当は誠実に守らなければならない。
なのに神の御名がないのだから守らなくても問題ないなんて言っているあなたがたのどこに神に対する恐れがあるのか、神に対する侮り、不遜しかないではないか。
そんな誓いならもう決して誓ってはいけない。むしろ「あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。」、そういう神の前に真実な誓いをしなさいとイエスは言われたのでした。
あなたがた人間の目には人間しか見えなくても、そこには神もおられ、見ておられ、聞いておられるのだ。その神の臨在を忘れてはならない、神の臨在を覚えて真理を語れ、誓えとイエスは言われたのです。
ここでも根本は全く同じです。
「**天にかけて誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方にかけて誓っているのだ。**」(23:22)がこのたびの「誓い」についての教えの結論であり、同時に出発点でした。
「**神の御座とそこに座しておられる方**」、神ご自身が何よりも、「**神殿**」よりも「**祭壇**」よりも重要です。
そして「**黄金と、その黄金を聖なるものにする神殿と、どちらが重要なのか**」と言われれば当然「**神殿**」となります。
「**黄金**」は「**神殿**」に持って来られて「**聖なるもの**」(神のもの)として受け入れられるからです。
しかし「**神殿**」よりも重要なのは「**そこに住まわれる方**」神ご自身です。
「**神殿**」に「**住まわれ**」、「**神殿**」を神のものとなさる神ご自身が「**神殿**」より重要なのです。
ですから「**だれでも神殿にかけて誓うのであれば、何の義務もない。**」などということにはなりません。
「**神殿にかけて誓う**」ことは神の御前で誓うことなのです。
「**ささげ物と、そのささげ物を聖なるものにする祭壇と、どちらが重要なのか。**」と問われれば当然「**祭壇**」となります。
「**ささげ物**」は「**祭壇**」の上で捧げられて「**聖なるもの**」(神のもの)として受け入れられるからです。
しかし「**祭壇**」よりも重要なのは「**祭壇**」において礼拝され、「**ささげ物**」をお受けになる神ご自身です。
ですから「**だれでも祭壇にかけて誓うのであれば、何の義務もない。**」と言うこともできません。
「**ささげ物**」を持って「**祭壇**」に行き、「**ささげ物**」を捧げた人は神の御前に行き、出たのであり、更には「**物**」と同時に自分自身をも神に捧げるのだからです。
「**祭壇にかけて誓う**」ことも神の御前で誓うことなのです。
こうしてイエスは何よりも神ご自身を第一とされ、尊ばれ、重要となさいました。
だれでも神ご自身を抜きにしては、神ご自身のことを忘れるなら、神ご自身の御前にあることを忘れるなら、「**神殿**」も「**祭壇**」も、今の私たちで言うなら教会も礼拝もむなし

いものとなってしまいます。
　また、「神の御霊が自分のうちに住んでおられる」「神の宮」（Ⅰコリント 3:16）である私たち自身もむなしいものとなってしまいます。
　ましてや私たちの「**黄金**」や「**ささげ物**」についてはなおさらです。
　そういうわけですから、私たちはこの地上にあって、人々の間にありつつ、何よりも生ける神の御前に、生ける神の子キリストの御前にあること、神の御霊の住まいとされていることを忘れず、覚えて生きたいと願います。
　そういう者として召してくださった神に感謝して、喜んで、自分自身を生きた聖なるささげ物として神にささげて生きたいと願います。
　神の御前で、人々の間で、神を恐れつつ、愛をもって真理を語り、キリストを証しして生きたいと願います。